

弧帯文を描いた伊予の複合口縁壺

松村さを里

1 はじめに

複合口縁壺は、口縁上部に直立または内傾しながら立ち上がる複合口縁部をもつ弥生時代後期の壺で、西部瀬戸内地域と北九州地域を主要な分布地とする。

2017年に(公財)愛媛県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った今治市の新谷古新谷遺跡^{にやこにや}では、口縁部に弧状の文様や渦状の文様が描かれた複合口縁壺が出土した(写真1)。宇垣匡雅氏は弧帯文について「基本的な要素は、平行する沈線によって形成される帯と、それが弧あるいは渦状をなして他の帯と交差する」点を挙げており、弧帯文は弥生時代後期後半の吉備を特徴づける文様とする(宇垣2018)。新谷古新谷遺跡の文様は、複数の線で弧帯が形成され他の帯と重層しながら組み合う帯表現がみられ宇垣氏の示す弧帯文に類すると考えられる。

弧帯文という名称は、近藤義郎氏が楯築遺跡の亀石を「弧帯石」、その文様を「弧帯文」と呼称して(近藤1980)、以後使用されるようになった。宇垣氏は特殊器台の文様の分析を通して、連続S字状文や立坂a、立坂bとそれに類する文様も「弧帯文」に含めて考える(宇垣1981)。同様の帯形文様は「組帯文」とも呼ばれ、高橋護氏は弥生時代終末期を中心に展開する直弧文の源流をなす文様の総称として「組帯文」を用いその展開から特殊器台の編年研究を進めた(高橋1984)。石野博信氏や北島大輔氏も「組帯文」を使用し「組帯文石」や「組帯文板」と呼称したが(石野1991・北島2004)、その後名称としては弧帯文が定着しているようであり、春成秀爾氏も特殊器台の連続S字状文、連続渦文や蕨手文も含め総称として「弧帯文」を用い(春成2018)、『楯築墳丘墓』でも「弧帯文」「弧帯文石」と報告されている(宇垣編2018)。

弧帯文の文様については、纏向石塚周溝出土弧文円板の「原単位図形」を最古の直弧文ととらえ(宇佐・斎藤1976)、「原単位図形」の出現と「直弧文」の起源や成立を問題として研究が進められてきた。櫻井久之氏は弧帯文から「原単位図形」によって構成される文様「原単位文」が出現し、直弧文が成立すると考える(櫻井2005)。菅原康夫氏は弧帯文がループ文系文様・交差文系文様・バチ形文系文様に区分でき、ほかに鍵手文系の文様を含め「原単位図形」の系譜を吉備・阿波地域の弧帯文に求めた(菅原1993・2012)。また古墳出現期にかけて列島各地で弧帯文の分布が知られ、渡邊恵理子氏は弧帯文の末端の「撥形文」に注目し吉備地域の系譜と展開を示し(渡邊2001)、北島大輔氏は近畿や伊勢湾沿岸地域における文様展開と吉備との地域間交流を論じた(北島2004)。



写真1 新谷古新谷遺跡の弧帯文土器

本稿では、新谷古新谷遺跡出土の弧帯文が描かれた土器の報告を行う。当該土器はこれまで現地説明会や速報展などで公開してきたが*1、報告書刊行前で図面は未報告であった。整理作業中に見つかった口縁部以下の破片とあわせて図化し土器の特徴と時期を明らかにしたい。文様は一見して典型的な弧帯文とは異なるが、文様理解の手がかりとしてまず新谷古新谷遺跡の文様構成や筆順を分析し、描かれた文様の特徴を整理する。そのうえで吉備の弧帯文との比較を通して類似点や関係を検討してみたい。もう一方で、弧帯文は伊予の複合口縁壺に描かれる文様としても特異なものであるため、伊予各地の複合口縁壺に描かれる文様特徴を整理し、今治平野の新谷古新谷遺跡に弧帯文が流入した背景について若干の考察を行うこととしたい。

1 新谷古新谷遺跡出土の弧帯文土器

(1) 遺跡の概要

新谷古新谷遺跡は愛媛県東部の今治市新谷に所在し、2015～2019(平成27～令和1)年度にかけて一般国道196号今治道路関連埋蔵文化財調査に伴い公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。遺跡は今治平野南西部の丘陵裾に位置し、背後には西側の高縄山系から平野部に向かって小丘陵がヤツデ状に伸び、丘陵と谷地形が連続している。周辺には弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が密集し新谷遺跡群を形成しており、近年今治道路関連で発掘調査を行った新谷古新谷遺跡・新谷森ノ前遺跡・新谷赤田遺跡はこの新谷遺跡群に含まれる。



図1 新谷古新谷遺跡位置図



写真2 4区谷1 土器出土状況

新谷古新谷遺跡は、南東―北西方向に長さ約550m、幅70～80mの範囲で面積約38,000㎡の調査を行った(図1)。遺跡は複数の丘陵と谷地形を横断して広がり、丘陵部と丘陵裾部から続く緩傾斜地には弥生時代後期から古墳時代後期の集落が形成され、100棟を超える竪穴建物を検出している。谷地形は調査区内で3条確認され、そのうち4区谷1の下層(III層)から弧帯文土器が出土した。

4区谷1は幅約30m、深さ約4mを測り、南西から北東方向に流下する。上層(II層上層)から古代の遺物とともに「凡直」刻書須恵器や長年大宝が出土し、中層(II層)からは古墳時代の土器や木製品(琴・鋏・鋤・杵・建築部材)が出土した。当該土器の出土した下層(III・IV層)からは、弥生時代後期後半～終末頃の壺や鉢・大型器台など祭祀土器

を含む多量の土器が出土している。土器は流路が湾曲する箇所に集中した状況がみられ、谷の周辺から投棄され水辺の祭祀を行ったと考えられる(写真2)。

(2) 弧帯文土器の概要

図2は弧帯文の描かれた壺である。大型の複合口縁壺で口径32.0cm、複合口縁部高4cmを測り、器高は66cm以上に復元できる。広口壺の口縁部を1次口縁とし、複合口縁部は1次口縁端部からやや内側に接合面をもち直線的に内傾して立ち上がる。口縁部は丁寧なヨコナデで仕上げられ、複合口縁部を接合した後に文様を描いている。複合口縁部はほぼ全周残存し、全面に弧状の

複合口縁部文様

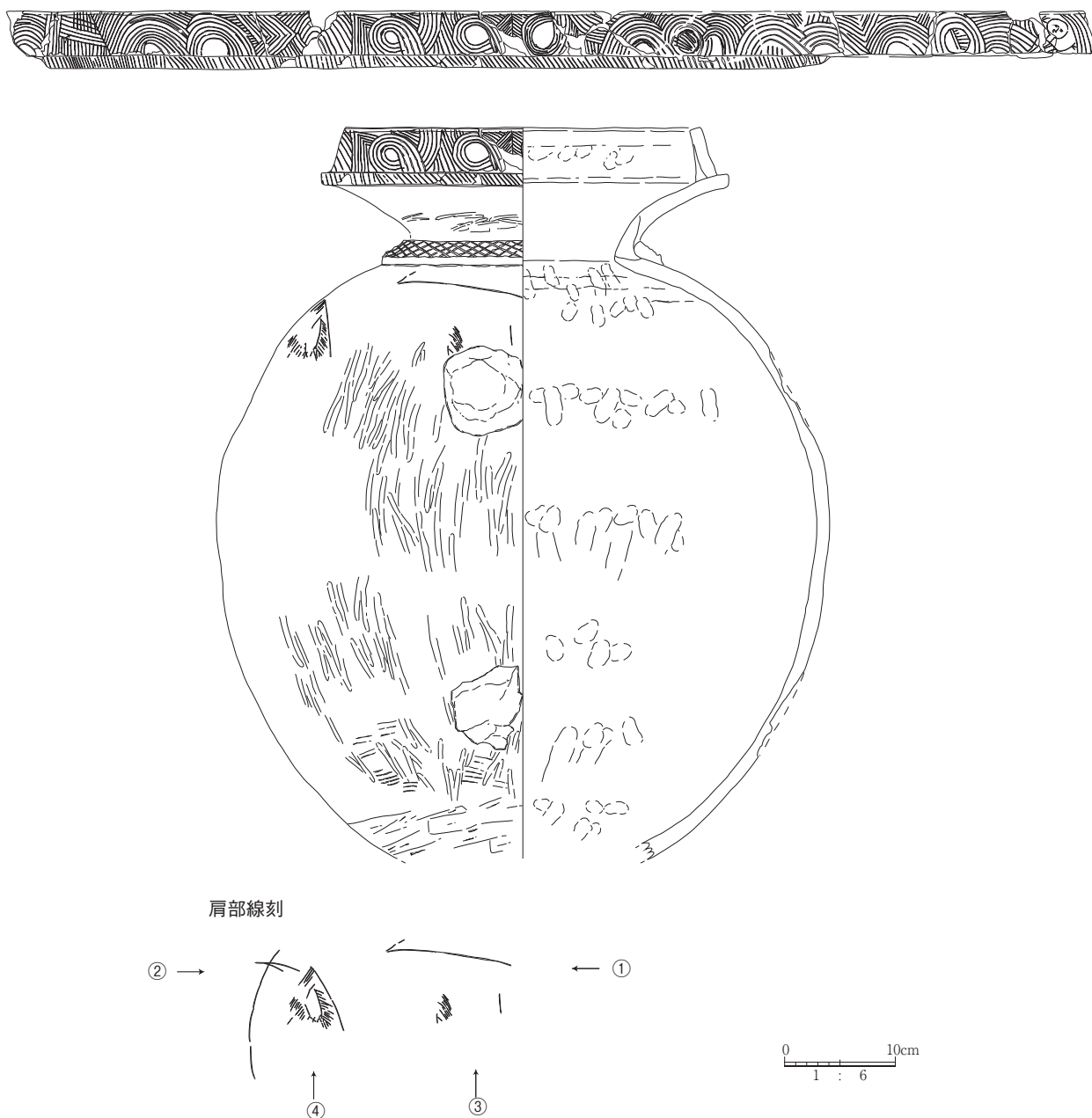


図2 新谷古新谷遺跡の弧帯文土器

帯文様が複数組み合っており、この弧帯文については後節で述べることにする。文様の線刻は、器表面が固くなる前に深く先端が細く鋭利な工具を使用して1筆ごと精確に描いている。複合口縁部と1次口縁の接合部はコの字状に突出し、端面には右下がりの斜線文を全周に刻んでいる。

頸部と突帯以下の破片は、現状で接点を確認できておらず図上で合成した。頸部には西部瀬戸内地域の大型壺に特徴的な幅広の突帯を貼り付け、斜格子文を刻んでいる。また頸部の立ち上がりの短い広口壺は伊予のなかでも愛媛県東部に多く、器形や文様特徴からもこの土器が在地で生産されたことが確認できる。全体形は破片を図上で合成しているが、肩部が丸く大きく張り出し、胴部は長胴で最大径が胴部中位まで下がっている。胴部下半にタタキを使用し底部にかけて丸みをもち外面の底部付近にはケズリを施している。焼成は良好で色調は浅黄橙色を呈す。胎土は精良で、ミガキ調整が全面におよび細部まで丁寧に仕上げている。これら特徴から、土器の時期は伊予東部編年(柴田2000)VI-1～2の弥生時代後期終末と考えておきたい*2。

(3) 肩部の線刻文(図2)

整理作業中に、弧帯文土器の肩部には複数の線刻文様があることがわかった。器面が固くなった段階で描いているとみられ口縁部の文様に比べ線刻は細くて浅い。破片の欠損部や表面剥離があり全体像はとらえられないが、現状で線刻は大きく4つに分解できる。

長短の線が2～3本組み合う記号様のものが2箇所(①・②)と三角や紡錘状の枠を斜線で充填した絵画様のものが2箇所(③・④)あり、両者は配置からみて組み合わせ、あわせて一連の線刻文様となる可能性がある。記号様のものは、頸部突帯下に横に長い弧状の線(①)、その左下に縦に長い弧状の線(②)が配置され、横または縦に長い弧状の線にく字状または十字に交差する短い線を加えている。絵画様のものは、横に長い弧状の線刻(①)の下に斜線で充填された文様の一部(③)が看取され、斜線は右下がり10本と左下がり1本に振り分けられている。外側の線刻や左下がりの斜線の上側は欠損のため不明である。③の右に少し離れた箇所にも縦方向の短い線刻がみられる。縦に長い弧状の線(②)の右側には、三角形の鋸歯文状の外枠の内側に紡錘状の線刻を描きその間を斜線で充填したような文様(④)がある。紡錘状の線刻は一筆描きではなく五角形のように一辺ごとに区切って描いている。斜線の本数は紡錘状の右側に右下がりの12～15本、左側に左下がりの斜線11～13本が数えられる。

これより下部に文様は確認できず肩部で線刻文様が完結するものと推定される。肩部の線刻内容と弧帯文との関連について現状では十分な検討ができていないため本稿での考察は控えたい。

(4) 口縁部の弧帯文(図3・4)

複合口縁部全周にめぐる文様を便宜的にa・b・cの3分割にして左側から文様構成についてみていく。cの右端とaの左端が接合して一周し連続する文様となっている。

aには半円形の弧文が連続する重弧文様、L字状に屈曲する文様とこれらの間を埋める斜線文・綾杉文がみられる。主文様として大きく描かれるものは、2個連続し上部が複合する重弧文様Aである。左側の弧文は9本～10本、右側の弧文は7本から成り、下から数えて左側弧文が6本目、

右側弧文が4本目より上部の線が入り組んでいる。その左を5本の縦直線文Bで帯状に区切り、Bと重弧文様Aとの間には右下がりの斜線を中心に綾杉状に左右振り分けた複合斜線文Cを描く。綾杉の左側斜線の上部には縦直線文が重複し、綾杉の下部は縦直線文で充填している。重弧文様Aの右に進むと屈曲文様Dがみられ、重弧文様Aとの僅かな空間は横走る直線文で充填している。屈曲文様Dは7本の線で逆くの字形に描かれるが左側上半のみに2本の斜線を追加しており、この2本線はDの下に潜り込んでいるようにもみえる。Dの屈曲頂部から右下がりに3本の短い弧線と6本の斜線が帯状に描かれ、屈曲頂部から上向きには弧状に回る重弧文様Eが左右の文様に潜

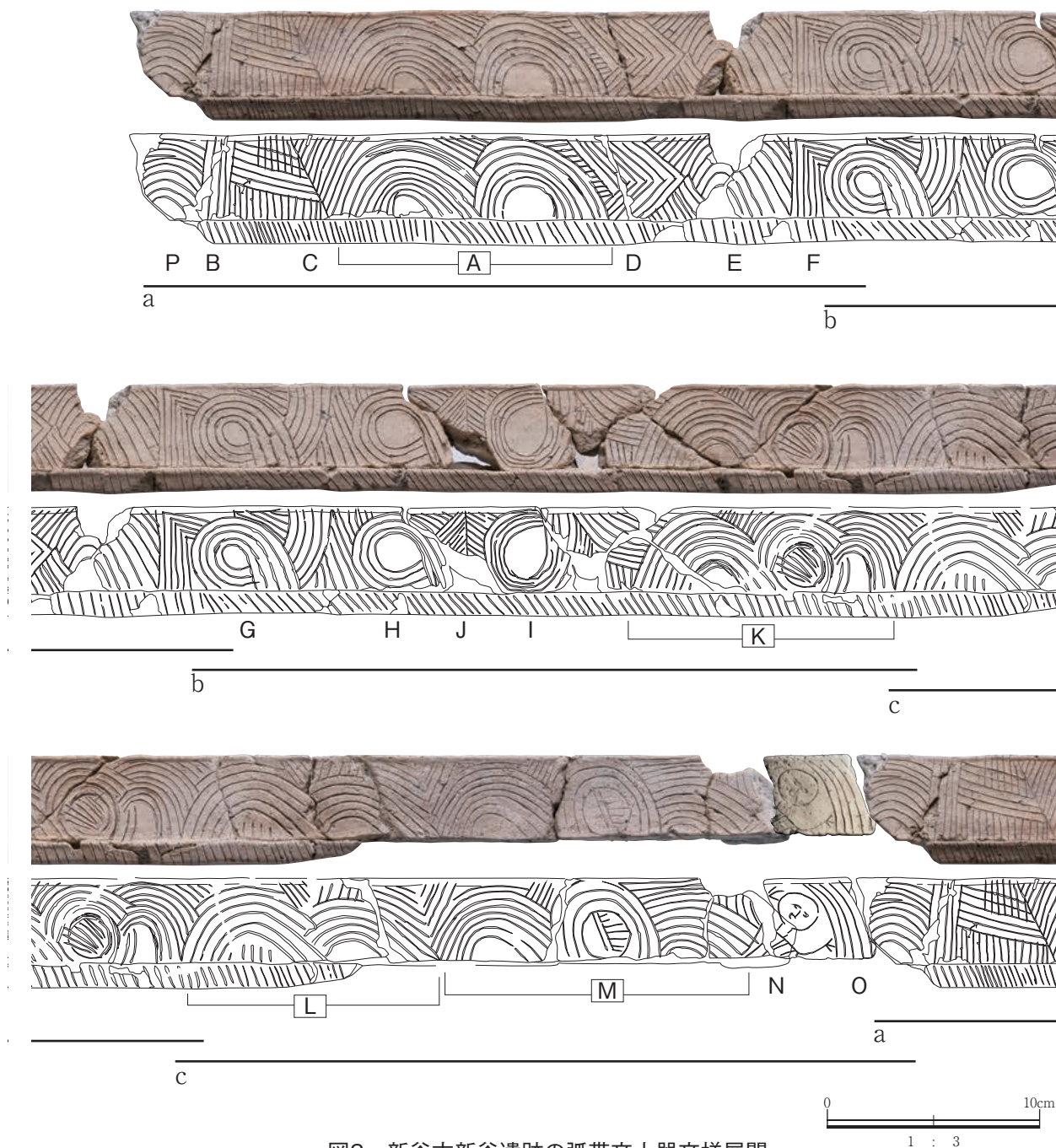


図3 新谷古新谷遺跡の弧帯文土器文様展開

りこむように描かれる。文様Eの弧文は内側から6本線で描き、余白となった右外側に3本弧線を追加している。その右に文様Eを切るように描かれた逆L字形の屈曲文様Fがある。Fは横線が5本、縦線が6本で構成され、左外側の縦1本は5本線でL字形を描いた後に追加したとみられる。

bには主文様として、渦状の帯表現3箇所と半円形の弧文が連続した重弧文様、円環の中心に帯文様のある重弧文様がみられる。さらに間を埋める斜線文・綾杉文・重層する弧文が描かれている。bの左端には屈曲文様Fを切る渦状の文様G、間隔をあけて同様の渦状の文様H・Iがある。文様G・Hは下から半時計回りに巻き込む渦文、文様Iは上から時計回りに巻き込む渦文で、いずれも巻き込んだ先は上の帯の下に潜る。渦文様Gは5本、Hは4本、Iは5本線で帯を成し、渦文の中心の空間は丸みをもった水滴形を呈す。渦文様Gの右上側には、上から下りてくる弧線6本の帯があり渦文様Gに繋がるように見える。このほかにも渦文様Gの背後には口縁端部付近に短いL字を刻み内側を斜線で充填し、渦文様G・Hの間を斜線文や弧文の帯で充填するなど帯文様が入り組んでいる。また渦文様H・Iの間には垂線から左右に斜線を振り分けた綾杉状の文様Jがみられる。重弧文様Kは半円形の弧文3個と円環が描かれている。この文様で中心に描かれているのは円環で、その内側に7本の斜線で円環の前後に重なるような帯の表現がみられる。円環の外側は多重の弧線が加えられ、右側および左側には半円形の弧文が入り組みながら重層する。左側の渦文様Iとの間には上から下りてくる弧文の帯もあり、残りの空白も直線文や斜線文で隙間なく充填している。

cには主文様として、半円形の弧文が連続した重弧文様、円環の中心に帯文様のある重弧文様、人物線刻がみられる。重弧文様Lは2個の半円形の弧文が連続し上部は弧線が入り組んでいる。文様Lの左側の弧文の中心には縦5本の短線がみられ、これも後ろに見える帯を表現したものと思われる。文様Mは文様Kに類似し、中心に円環がありその内側に斜線2本、横7本の線で円環の後ろに重なる帯の表現がみられる。円環の外側は長楕円形に多重の弧線が加えられ、右側および左側背後には半円形の弧文が重なっている。さらに重弧文様LやMの背後には斜線文や直線文が描かれ間を埋めている。

cの右端には人物線刻Nがみられる。頭部は横にやや歪んだ円形で右側と左側を2筆で首まで描き、首は肩とみられる斜線から短く直線的に立ち、肩から上には左右に広げた両手が描かれている。手は3本線で表現され、図正面からみて右側の腕はわずかに湾曲した1本線で肩に繋がっている。左側の腕については欠損のため明らかではないが、左肩に最も近い箇所から立ち上がる弧線がそれである可能性が高い。左肩より下は腰付近まで直線が伸び、その内側を斜線で充填している。顔には目を2筆で描き、上瞼と下瞼を表現していると思われる。鼻は直線で真っ直ぐ伸び、口は2筆で大きく開いた形となる。人物線刻Nの右には口縁端部側から下向きの弧線Oが6本線で描かれ、aの左端の半円形の重弧文様P、その右に5本単位の縦直線文Bが続き文様が一周する。

(5) 弧帯文の構成と筆順(図5)

つぎに弧帯文の構成と線刻の順を検討してみよう。

さきにみたように主となる文様は、①半円形の弧文が2個連続する重弧文様、②半円形の弧文

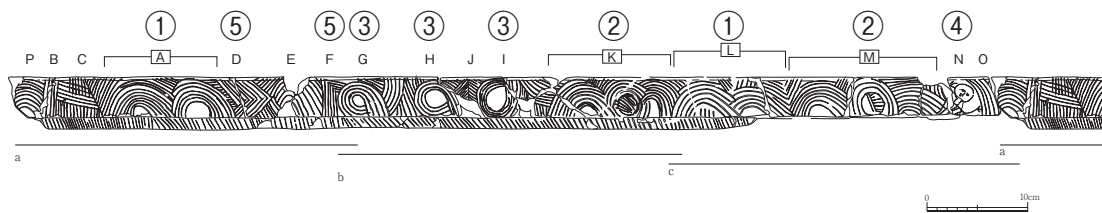


図4 弧帯文土器の文様配置

が3個連続し中央の円環に帯表現のある重弧文様、③渦状の文様、④人物線刻、⑤L字状に屈曲する文様が抽出できる。

①半円形の弧文が2個連続する重弧文様

文様A・Lの2単位あり、配置は離れているが口縁を上から見た際にほぼ180度対角に位置する。2個連続するものは左側の弧文から描き始め、Aでは左側の弧文を内側から6本まで描いた後に右側の弧文を内側から5本描き、さらに左側の弧文を3～4本加え、最後に右側の弧文を2本加える。Lも同様に、左側の弧文を内側から3本まで描いた後に右側の弧文を内側から4本描き、さらに左側の弧文2本、最後に右側の弧文を2本加える。つまり2個連続する重弧文を左から描き上部は帯が入り組むような表現をとる。Lには左側の弧文の中心に帯表現と思われる縦5本の短線が描かれている。

②半円形の弧文が3個連続し中央の円環に帯表現のある重弧文様

文様K・Mの2単位あり、配置はK・L・Mが連続して描かれている。半円形の弧文が3個連続するものは、中央の円環の位置を決めて次に左側の弧文、最後に右側の弧文を描いている。

Kでは中央の円環を2筆以上で上下を継ぎ足しながら二重に描いた後、左側の弧文を内側から4本まで描き、中央の円環の外側3本と右側の弧文を内側から4本まで描く。その後左側の弧文に戻り、最も外側に位置する9本目の弧線を先に描いてからその内側5～8本目を加えている。最後に右側の弧文に移り5～8本目の弧文を加えている。この5～8本目の弧文の筆順は、文様Lの右側弧文5本目を描いた後で、6本目を描く前となる。筆順は複雑ではあるが、文様Kは文様Lに連続して描かれ最後にLと繋ぐ意図が読み取れる。

Mも同様であるが、中央の円環を2筆以上で上下を継ぎ足しながら一重描いた後、その外側3本の弧文を加え中央の円環部を先に仕上げています。その後、右側の弧文を内側から7本、左側の弧文を内側から7本と右側と左側の弧文は連続して描く。筆順は線の切合いからみてLの右側弧文を描いた後Mの左側の弧文を描いており、人面文様Nの胸部を描いた後Mの右側弧文が描かれており、Mの左右弧文は両側のL・Nが配置された後に描かれたと考えられる。

円環の内側の帯表現は、KとMでやや異なる。Kでは7本の斜線で円環の前後に重なるような帯の表現、Mでは内側に斜線2本、横7本の線で円環の後ろに重なる帯の表現がみられる。帯の向かう方向は、Kでは下側3本の斜線が円環の内側から左側の弧文の一部へ、Mでは円環の内側から右側の弧文の一部へ意識的に伸ばしている可能性がある。

③渦状の文様

G・H・Iの3単位があり、間に他の弧文や斜線文を挟みながら横に3個連続している。G・Hは

帯の開放される先が下向きで、Iは上向きである。いずれも一番内側の巻き込み部から開始し、G・Hは反時計回りに、Iは反時計回りと時計回りを使い分けて筆を進めて、1本ずつ外側に渦文を描いたと推定される。描き方は一番左側のGが最も精緻でH・Iに移ると筆の運びや線の間隔に乱れが生じているように見える。またGには一連のものか判断できないが上方から下向きに6本の弧文も伸びており、渦状の文様の繋がりを見せている。Gから配置を決めていったと考えられ、左側からG・H・Iの順で渦状の文様を描いた可能性を示しておきたい。

④人物線刻

人物線刻Nは1つで、Mの右側に配置されている。身体と顔の主軸は斜めで、左下から右上に立ち上がり手を広げたような動きのある表現である。顔の表情は目を開け口を大きく開いていると思われる。

Nの両側は弧文で囲まれており、筆順は身体部分とみられる鋸歯文状の外枠が左側の弧文を切っていることから、Mの右側弧文よりも先に描いたと考えられる。

人面の描かれた箇所は幅5cm、口縁部の高さ4cmの細片となっていた。壺の口縁部はほぼ全形残存しているが、この部位のみ破面が摩耗し接合後にも隙間が生じており、意図的に細片化した可能性も考えられる。

⑤L字状に屈曲する文様

D・Fの2単位があり、重弧文様Aと渦状の文様Gの間に位置する。筆順はAを描いた後D、Gを描いた後Fが描かれ、屈曲文様は主文様の重弧文様や渦文の後に描かれている。またDは逆くの字形でFは天地逆のL字形で角を背中合わせに向けている。このD・Fは帯の屈曲を表し、Dから左側へ、Fから右側に帯が連続する表現と考えられる。

これまで見た筆順から、文様帯は主文様を先に配置し、その後背後に斜線文や弧文を付加しており、また筆順にはそれぞれ一定の決まりが読み取れた。主文様が組み合うものについては、中心部を先に描き複数の文様の切り合うものは左側を先に、右側を後にするものが多い。半円の弧文は基本的に右から左に、横線は右から左に筆を動かしていることから右利きの者が描いた可能性が考えられる。円環と渦文については反時計回りと時計回りの筆を使い分けている。そして大きくみると、弧文の帯が入り組みながら連続する文様を左から右に描き進めたとみられる。

では、全周する文様帯のどこから描き始めたのであろうか。

文様帯全体で最も目立つ文様は複数連続する重弧文様である。このうち①の半円形の弧文が2個連続する重弧文様が2単位あり、口縁部円周の180度対角に1単位ずつ配置されていることから①が最初に描かれた可能性が高いと考えられる。次に①の横に連なる②の半円形の弧文が3個連続し中央の円環に帯表現のある重弧文様が描かれ、重弧文様の2種の順は①から②とわかる。②のなかでも細部をみると中央の円環は先に描かれる。

③の渦状の文様は⑤の屈曲文様よりは先であるが、②の3個連続する弧文より先であるか明らかでない。④人物線刻は②の3個連続する弧文の右弧文よりも先に描かれている。しかし②の中央の円環の描写とどちらが先かについて明らかではない。人物線刻は②の中央の円環を描く前または後で配置されたと考えたい。

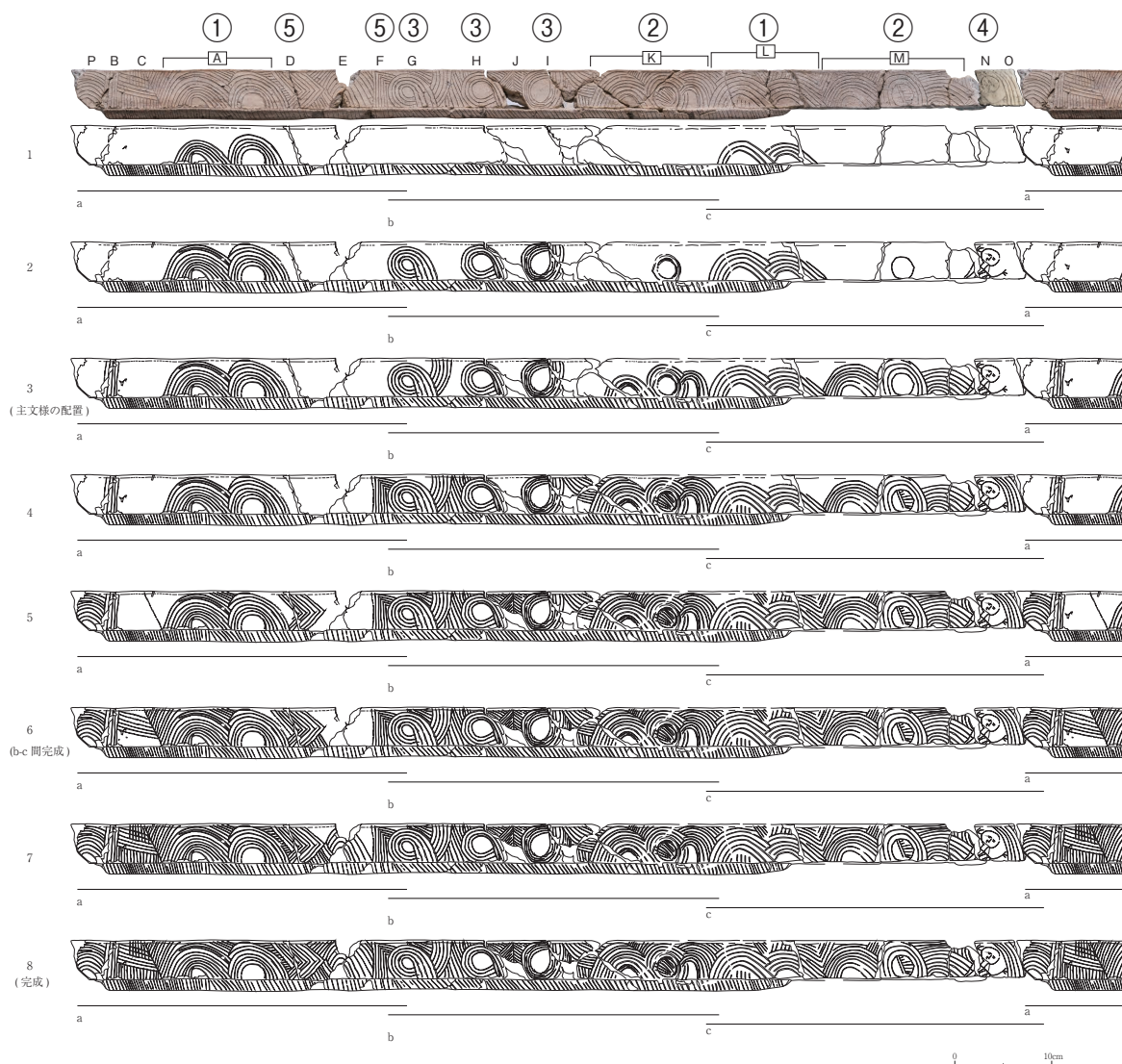


図5 弧帯文土器の文様分解図

その後は、⑤の屈曲文様のほか、渦状の文様や重弧文様の背後に太めの帯状の弧文を加え、文様の配置はほぼ決まる。Gの右上やKの左上に口縁端部側から下りてくる太めの帯状の弧文があるが、これは隣合う主文様が途切れないように帯の連続を表現しているのかもしれない。主要文様の周りを仕上げた後、さらに空間を埋める弧文・斜線文・綾杉文が描かれたと考えられる。

主文様の背後を埋める文様のなかでも、左右の文様帯の流れからみて不連続性を感じるところがB・C間とD・F間の文様である。Bは縦方向に左右の文様を切るような5本の直線文で、Cも斜方向の直線と綾杉文で左右を分けている。B・C間では文様帯のなかでも弧文の流れが途切れたような印象を与える。

またD・F間を充填する文様はEのほか斜線文や弧文があるが、これらがすべて両側の屈曲文様D・Fに切られている。屈曲文様によって左右の文様が区切られ、全周する文様帯の中で、文様はDより左側とFより右側を仕上げ、D・F間を充填する文様は最後に加えられたと推定される。

3 弧帯文の類例(図6・7)

弧帯文の類例は吉備地方に集中して認められ、特殊器台の文様展開、弧帯文の文様系譜と原単位図形、各地への文様の展開についてこれまでに多くの研究の蓄積があり(宇垣1981・高橋1984・菅原1993・渡邊2001・菅原2002・北島2004・櫻井2005など)、これらを参考に検討を進めていきたい。

近年では宇垣氏が吉備の弧帯文の特性をまとめている。宇垣氏によれば、弧帯文を刻む対象となるのは石材、木材、土器があり、弧帯文石、弧文円板や装飾板などの木材の弧帯文は浮彫で製作に時間と労力を要し、沈線で刻まれる土器とは区別されるものであり、土器の弧帯文も特殊器台の文様帯とまた区分される(宇垣2018・宇垣編2021)。

新谷古新谷遺跡の弧帯文土器についても、宇垣氏の弧帯文資料の区分にしたがい、特殊器台を除いた吉備の弧帯文石と土器の弧帯文との比較から始めてみる。

(1) 弧帯文石

楯築神社弧帯文石(図6-1)と楯築神社出土弧帯文石(図6-2)がある*3。大きさと形状が異なるが、ともに上面、側面、小口に弧帯文が浮彫で刻まれ、下面の文様は帯の輪郭を彫り出しているが未完成の状態となる。

弧帯文は、円形に彫り出された渦心円*4に沿って帯が渦巻くようにめぐり、「一本の帯が切れ目なく全面に広がる図形」のように全面が埋められる。渦心円の周りには帯が下になり上になりながら2重、3重にめぐり、渦心円の中には断面三角形の隆起をもち短線で帯表現をもつ。楯築神社弧帯文石の側面には1箇所顔が浮彫で表現され、楯築神社出土弧帯文石には側面に帯の端をバチ形に広げた表現が多数みられる。帯の線表現は細部が異なり、楯築神社弧帯文石では太い沈線で中心線と側線を入れるが、楯築神社出土弧帯文石は細い沈線で表現され中心線や側線がない。楯築神社弧帯文石と楯築神社出土弧帯文石は、後期後葉という同時期に製作されたものとされる(宇垣編2021)。

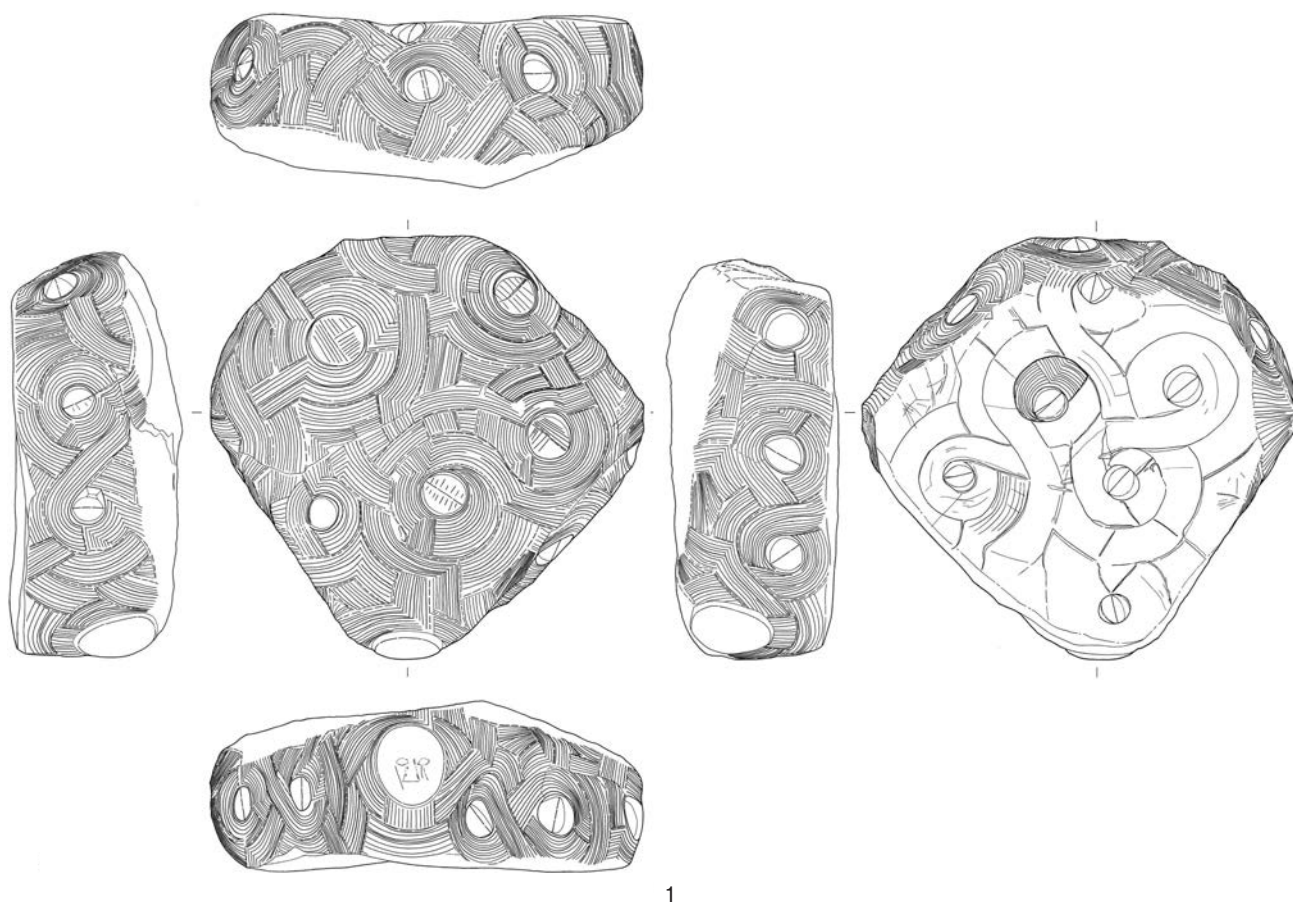
新谷古新谷遺跡の弧帯文にも弧帯文石との類似を指摘することができる。複数の弧線帯を絡ませながら画面全面を埋めるような文様展開と、文様個別では渦状の帯文様や屈曲する帯、環状部の中に線を入れた表現が認められる。とくに弧帯文石の特徴の一つでもある環状部の中の帯表現は、新谷古新谷遺跡の弧帯文と百間川原尾島遺跡(図7-4)にも見られるが、その原形を知らずに描くことは難しいのではないだろうか。また弧帯文石の側面に彫り出された顔を真似たものか、新谷古新谷遺跡の弧帯文土器には線刻で顔の表現が描かれている。

弧帯文石と土器の弧帯文は質的には異なる点が多く、直接的な比較は適当ではないかもしれないが、新谷古新谷遺跡の弧帯文は弧帯文石の文様を理解し、帯の表現や一部の文様を写し取り込んでいると評価して良いのではないだろうか。

(2) 土器の弧帯文

土器に描かれた弧帯文のなかで、弧帯文石との関連がうかがえるものがある。

岡山県百間川今谷遺跡(図7-3)は器台脚部外面に、渦巻くようにめぐる弧線の帯文様が描かれ



0 20cm
1・2:S=1/16

図6 吉備の弧帯文の類例1

る。複数の線で弧状の線を描き半円から長楕円形の弧文が帯を形成し、複数上下左右に連なっている。帯の中心は凸レンズ形に刻まれその周りに弧状の線が描かれる。後期III期^{*5}である。

弧帯文石の環状部と環状部を繋ぐようなS字状の帯表現がみられる弧帯文は、岡山県百間川原尾島遺跡の器台(図7-4)、岡山県高塚遺跡の器台(図7-5)がある^{*6}。

百間川原尾島遺跡(図7-4)の器台は、受け部内面に弧帯文石に似た弧線帯を描き、左拓本では見えにくい環状部が表現され中に斜線で帯が表現されているという。また右の破片ではU字形に2手に分かれた弧線帯に帯端の表現(高橋1984)を形成している。描き手がよく弧帯文を理解している資料とされ(宇垣2018)、後期III期後半に位置づけられている。

高塚遺跡(図7-5)は器台の受け部内面に3条1単位とみられる弧線の帯がS字状にのびる。口縁は上下に大きい拡張口縁でその外面には上・下段に連続する半円形の重弧文様があり、中段には鋸歯文が施文される。重弧文様は上段が弧の山を下に、下段が弧の山を上にし横に連続している。後期III期後半である。

次に弧帯文ではよく取り上げられる資料であるが、上東遺跡波止場状遺構の鉢(図7-6)、足守川矢部南向遺跡の器台(図7-7)、前山遺跡(図7-8)、津島遺跡河道1の壺(図7-9・10)、宮山遺跡器台脚部(図7-11)をみてる。吉備のバチ形文については渡邊恵理子氏の検討があり、後期III期～古墳時代初頭のごく短い期間に限られることが示されている(渡邊2001)。上東遺跡(図7-6)の鉢には胴部外面全体に弧帯文が描かれ、数本の帯が重層し4方向にバチ形を作り出している。隣り合うバチ形の間には巴形の空間が形成される。矢部南向遺跡(図7-7)の器台内面には、両側に広がる弧線帯が2つ合わさりバチ形文が形成されている。前山遺跡(図7-8)は脚部外面に、複数のバチ形文を組み合わせた文様や渦状に巻き込んだ弧帯文がある。津島遺跡(図7-9)は壺の口縁内面に単線で描いた分銅形のバチ形文があり、津島遺跡(図7-10)の壺の口縁部外面には鋸歯文内が複合する斜線で埋められ、その上にバチ形文が描かれている。

弧帯文が人面文と共に描かれる例が多いことも指摘されており(北島2004・宇垣2018)、宮山遺跡(図7-11)の器台脚部には人面文と弧帯文、バチ形文が描かれる。津島遺跡(図7-12)は壺の拡張口縁に人物の線刻が描かれており二次焼成の結果細片化したと報告されている。弧帯文はないが新谷古新谷遺跡と同様壺口縁に描かれる人物線刻であり、細片化しているという共通性もある。

吉備の土器と新谷古新谷遺跡の弧帯文との類似点について整理しておく。新谷古新谷遺跡の弧帯文は、岡山県百間川今谷遺跡(図7-3)、百間川原尾島遺跡(図7-4)、高塚遺跡(図7-5)のように複数の線で渦巻く弧状の帯を形成する表現のものに近いと考えられる。しかし、弧帯文石との関係性が指摘されている土器の弧帯文には、百間川原尾島遺跡(図7-4)や高塚遺跡(図7-5)のように環状部を繋ぐようなS字状の帯表現がみられる。新谷古新谷遺跡では環状部が表現されるが半円形の弧文を複数横に連続させた文様であり、3つの渦状の文様とともに各帯が切れた状態といえ、環状部を繋ぐS字状の帯文様とは異なる。また、新谷古新谷遺跡では主文様を決めてから線を加え周囲に次々と文様帯を加えていくような描き方で、最初から連続するS字状の帯文様を意識した手法ではない。新谷古新谷遺跡の弧帯文が半円形の弧文の連続となった要因として、壺の複合口縁部という施文可能な画面が限定していることも影響しているのかもしれない。

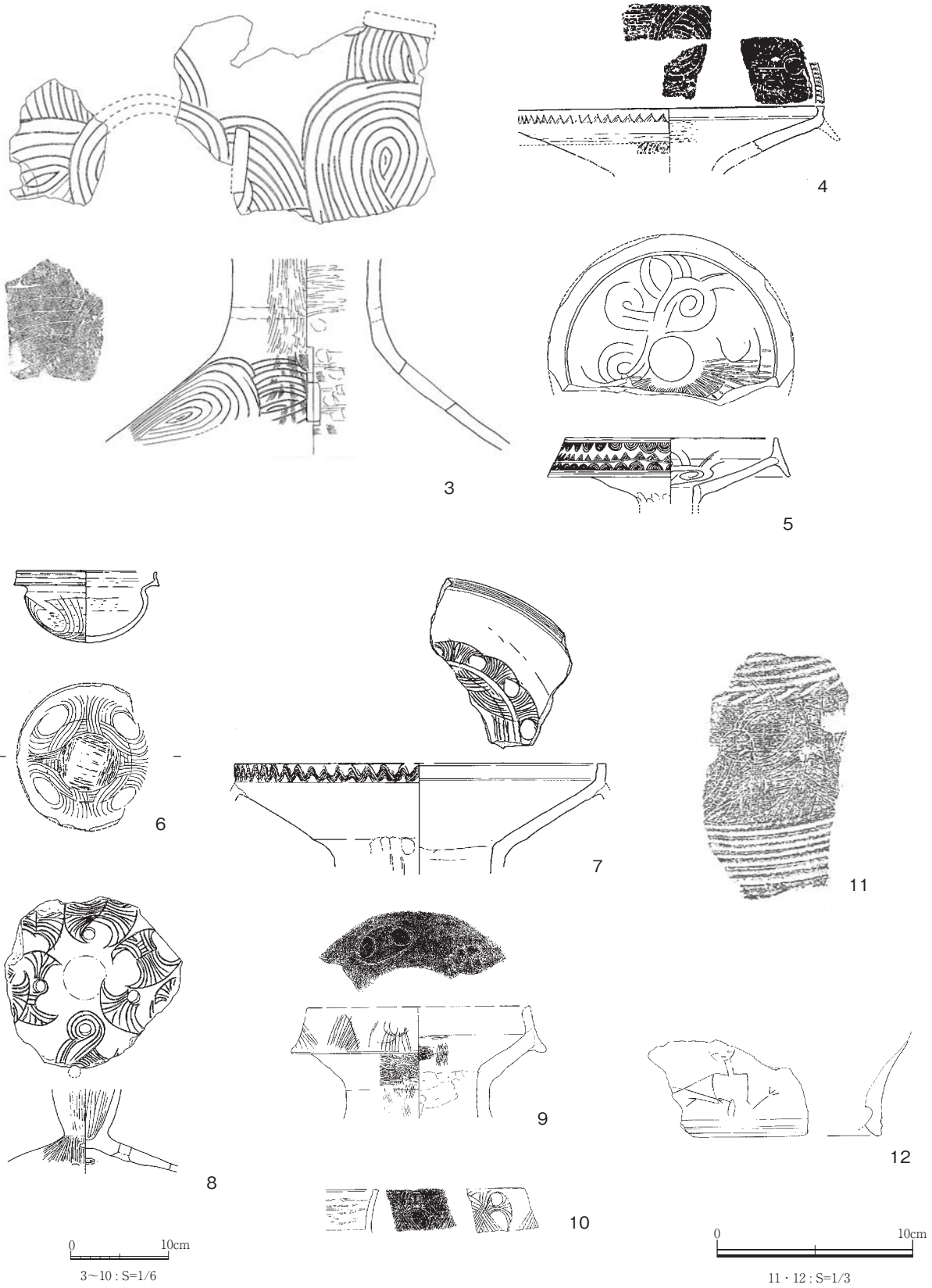


図7 吉備の弧帯文の類例2

新谷古新谷遺跡の主文様とした①～⑤についてみると、①②と全く同じ半円形の弧文が横に連続する文様は他に確認できていないが、岡山県百間川今谷遺跡(図7-3)は長楕円形の弧文が帯を形成し、複数上下左右に連なっている点では類似するといえるだろう。①②は弧帯文石を写した帯表現の一つといえるのか、吉備や他地域でみられる環状部を繋ぐS字状の帯文様との関連については今後類例の検討を重ねて判断したい。そして、③の渦状の文様、④人物線刻、⑤の屈曲文様は吉備の土器にも部分的に近似するものがある。一方、新谷古新谷遺跡では渦状の文様や重弧文様が主となり、帯の端部表現とされるバチ形文は採用されていない。新谷古新谷遺跡弧帯文土器の伊予東部編年VI-1～2は吉備の才の町式と併行するとされ(柴田2001)、弥生時代終末期に伊予東部に弧帯文が流入したと考えておきたい。

ここで、弧帯文の施文位置が伊予ではなぜ複合口縁壺の口縁であったのかという疑問について考えてみる。吉備の弧帯文の施文位置については「後期後葉には器台の口縁受け部内面が中心となっていたのに対し、末葉には壺の大きく拡張した口縁部、壺や甕の肩部へ描くことが一般的となる」ようである(宇垣2018)。吉備では弥生時代後期に器台受け部や壺の口縁は拡張口縁となり、同時期に伊予では複合口縁壺が発達し同様に複合口縁部という直立した施文部位を形成している。弥生時代後期末葉に吉備の拡張口縁に描かれるようになった弧帯文は、伊予では形態の似た壺の複合口縁部を施文位置として文様を写した可能性がある。

4 伊予の複合口縁壺に描かれる文様(図8)

西部瀬戸内地域の複合口縁壺については、各地土器編年のなかで変遷や消長などが取り上げられてきたが、西部瀬戸内地域を横断した出現時期と系譜についてはようやく近年整理されてきた。出現時期は、伊予中部(松山平野)と豊後が後期前葉に遡るとされ(梅木2015、坪根2010)、周防・安芸・伊予東部(今治平野)・伊予南部(宇和盆地)ではこれよりも出現が遅れ、後期後半には西部瀬戸内地域を中心に広がりをもつようになる。また、複合口縁部には文様をもつものと無文のものがあり、伊予中部(松山平野)や豊後では櫛描波状文が主文様として描かれるなど各地の文様特徴も明らかになってきた。

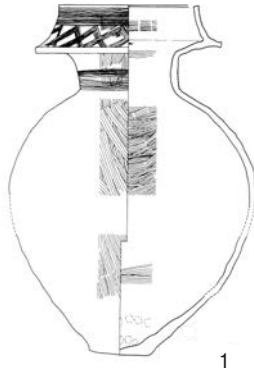
ここで伊予地域の複合口縁壺に描かれる文様の特徴をまとめておきたい。

(1) 伊予中部

松山平野に遺跡が集中して分布し、弥生時代後期には大規模集落も多い。複合口縁壺は後期前葉(伊予中部編年V-1)に出現、後期中葉(V-2)以降急増し古墳時代前期初頭までみられる(梅木2015)。複合口縁壺の出現比率は後期後葉(V-3)には壺の50～70%を占め、大型壺はほぼ全てが複合口縁壺となる。複合口縁部文様は、前葉～中葉までは沈線文と櫛描の山形文やX字の文様がみられるが、中葉以降は櫛描波状文が主流となる。複合口縁部の形態はコの字状に突出し大きく内傾するものが多く、櫛描波状文も2～3段と重ね精細な文様を施すものが多い。松山平野は後期後半以降に西部瀬戸内地域の中でも他地域への影響力をもつ地域の一つで、複合口縁壺の出現や櫛描波状文を多用する文様構成においてもその影響が伊予南部や伊予東部に及んでいる。

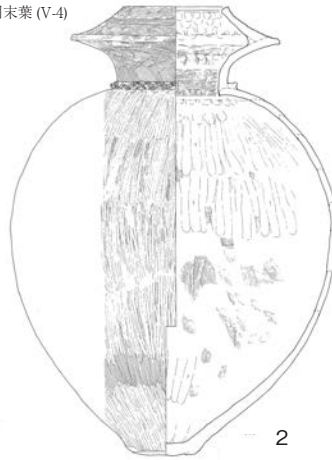
(1) 伊予中部 (松山平野)

後期前葉 (V-2)



1

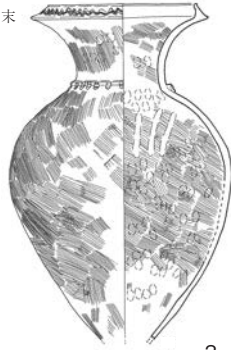
後期末葉 (V-4)



2

(2) 伊予南部 (宇和盆地)

後期後半～末



3

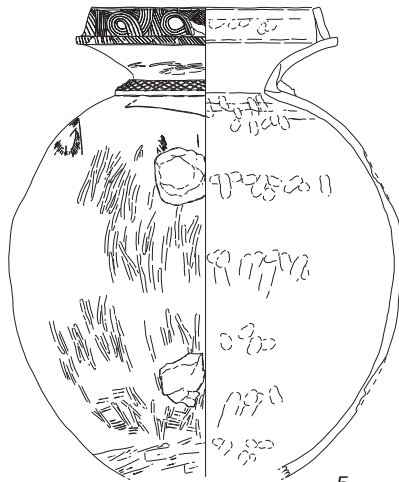
後期末



4

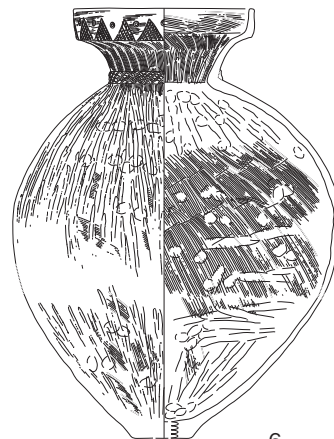
(3) 伊予東部 (今治平野)

後期終末 (VI-1～2)



5

後期終末～古墳初頭 1 (VI-1～古墳前期 1)



6

0 10cm
1 : 10

図8 伊予の複合口縁壺の文様

(2) 伊予南部

宇和盆地に遺跡が多く分布する。複合口縁壺は松山平野より一段階遅れ後期前半に出現し、後期後半から末に増加し古墳時代初頭までみられる。複合口縁部文様は、後期後半から末に櫛描波状文を1～2段に施すものが主体となり、刺突文や鋸歯文も少数みられる。複合口縁部の形態は逆くの字状に屈曲するものが大半で、コの字状に突出して大きく内傾するものは少ない。器形や文様特徴において松山平野の影響が強いが、豊後の国東半島との共通性も指摘されている(高木2015)。

(3) 伊予東部

今治平野や道前平野などに遺跡がまとまっており、大規模集落も確認される。複合口縁壺は後期後葉(伊予東部編年V-3)に出現、末葉(V-4)から古墳時代初頭(VI-1・2・古墳前期1)に盛行し、古墳前期までみられる。複合口縁壺の出現は松山平野の影響と考えられ、後期後葉までは複合口縁部の形態や文様においても共通性が高い。後期末葉以降は、複合口縁壺の出現比率が壺の30～40%を占め器種として安定するようになる。このころから伊予東部独自の複合口縁壺の変容がみられるようになり、複合口縁部の形態は逆くの字状のものが増え、広口壺だけではなく短頸の壺の複合口縁化が進む。文様についても櫛描波状文が一定程度採用されているが、松山平野に比べて少なく、松山平野ではあまりみられない鋸歯文が多用されるなど違いが明らかになる。

鋸歯文は弥生時代後期に吉備で発展し、装飾された壺や高杯、器台など祭祀用とされる土器によく採用される(宇垣2000)。伊予のなかでは東部において弥生時代後期末葉から古墳時代初頭ごろの複合口縁壺によく描かれる文様となり(松村2015)、この頃に斜線で充填する鋸歯文が定着したと考えられる。弥生時代終末～古墳時代前期の今治市朝倉下経田遺跡では、変形した鋸歯文も多く確認されており(図9)、鋸歯文の内側に垂線を引き斜線を左右綾杉状に振り分けたものや、鋸歯文の背後に斜線や直線を入れたり斜線で充填した鋸歯文を上下交互に配置したもの、鋸歯文で画面を埋めたものも出現している。

後期終末～古墳初頭 1(伊予東部 VI-1～古墳前期 1)

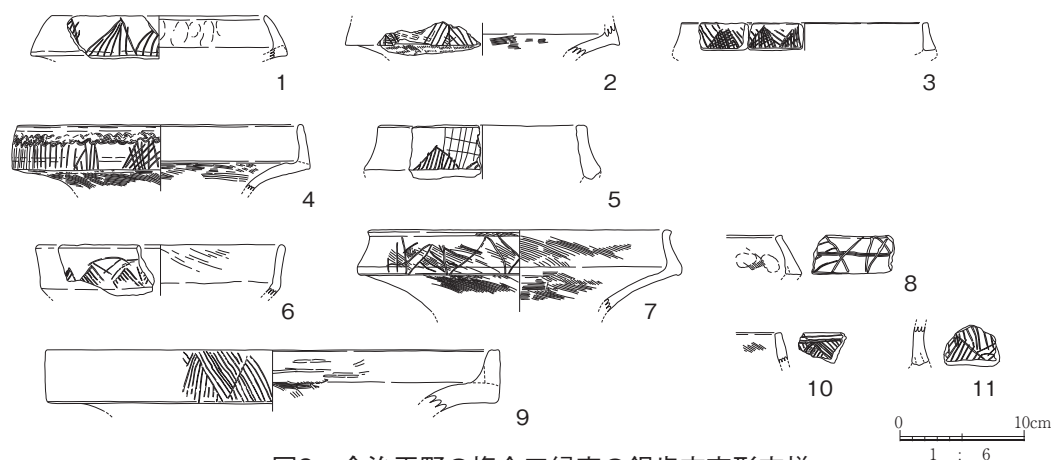


図9 今治平野の複合口縁壺の鋸歯文変形文様

後期末末～古墳初頭 (伊予中部 V-1～3)

古墳前期 (柴田編年 I-1)

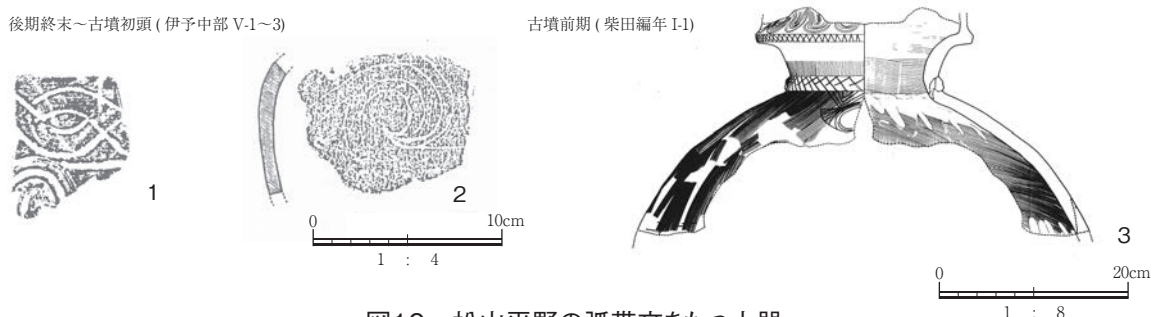


図10 松山平野の弧帯文をもつ土器

吉備からもたらされた鋸歯文は、今治平野では複合口縁壺が独自の展開を始める後期末葉ごろに複合口縁壺の文様として選択され定着し、弥生時代終末ごろには鋸歯文の変形や変容がみられ鋸歯文以外の文様も取り込み始めていた。吉備でも鋸歯文と弧帯文が組み合って描かれることは多く、鋸歯文とともに弧帯文がもたらされた可能性もあり、このような動きが今治平野で複合口縁壺の文様に吉備由来の弧帯文を取り込むことに繋がったのではないかと考える。

5 今治平野に弧帯文がもたらされた背景

最後に遺跡の特徴と今治平野に弧帯文がもたらされた背景についてふれまわめとしたい。近年の今治道路関連発掘調査によって新谷古新谷遺跡・新谷赤田遺跡・新谷森ノ前遺跡は新谷遺跡群ととらえられ、今治平野においても弥生時代後期遺跡の密集する地域であることが明らかになった。各遺跡の時期や動向が少しずつ異なるが、弥生時代中期後半から後期にかけて丘陵部と谷部に遺跡が展開し鍛冶遺構を伴う竪穴建物が検出され鉄器生産を行っていたことや、谷部から多量の木製品や木製品が出土し木器生産にも関わっていたことが各遺跡で確認された。谷部や溝からは龍の絵画土器など祭祀に使用された土器も出土しており、弥生時代後期後半には集落周辺の水辺で大規模な土器祭祀が繰り返されていたと考えられる。祭祀土器は大型器台や壺、高杯や鉢などがあり、後期中頃から後半の土器には長頸壺や装飾壺、高杯、脚付鉢などに吉備の影響が濃く認められる。

今治平野では複合口縁壺や器台の文様に鋸歯文が多用されることも含め、この地域には吉備からの土器なかでも祭祀に関わる土器が流入しやすい背景があったと考えている。弥生時代終末に弧帯文がもたらされたことも文様単体としてではなく鋸歯文を描いた祭祀土器の流入と連動していると考えており、今後は新谷古新谷遺跡の集落の性格や遺物の検討も深めていきたい。

おわりに

本稿では新谷古新谷遺跡から出土した弧帯文土器について、文様を分析し吉備の弧帯文との比較を中心に類例を探った。伊予出土の弧帯文土器については、松山平野でも弥生時代終末から古墳時代前期に数例知られている。図10-1は樽味高木遺跡4次出土の複合口縁部細片^{*7}で、伊予の複合口縁壺に描かれた弧帯文の一つに数えられる。外面に2本の線で弧帯文が描かれ、上弦と下弦の弧が交互に入り組んだ弧帯文がみられ、その下には櫛描波状文が巡っている。西部瀬戸内系文

様である櫛描波状文と弧帯文が組み合う特徴的な文様構成である。図10-2は文京遺跡出土の土器片で、3本の線で渦状の文様が描かれており、徳島県矢野遺跡の中心線のある3線帯表現のループ文との関連が示されている(菅原2002)。図10-3は宮前川遺跡津田第II地区出土の複合口縁壺で、肩部に下向きの鋸歯文とバチ形文がみられる。このほか道後姫塚遺跡出土の広口壺内面には、岡山県酒津遺跡の肩部線刻文と関連するとされる原単位系直弧文(名本1984)が報告されている。

伊予の弧帯文についても展開をはじめ各地との併行関係、地域間関係などについて検討の必要性を感じているが、筆者の力量不足のため今回は検討が及ばなかった。吉備で生まれた弧帯文が各地に波及していくなかで新谷古新谷遺跡の弧帯文土器はどのように位置づけられるのかさらに追求が必要であり、これについては今後の課題としたい。

謝辞

新谷古新谷遺跡で弧帯文土器が出土した2018年には、宇垣匡雅氏に土器を見ていただき吉備の弧帯文や新谷古新谷遺跡の文様の表現についてご指導をいただきました。また本稿の準備にあたり、新谷古新谷遺跡弧帯文土器の展開合成写真と文様トレースは現地説明会および速報展で石貫弘泰氏、眞鍋昭文氏が作成したものを使用させていただきました。記して感謝申し上げます。

註

- *1 新谷古新谷遺跡の弧帯文土器について過去の公開内容と配布資料をまとめておく。2018年2月新谷古新谷遺跡現地説明会開催、現説資料配布。2018年11月考古学研究会岡山例会発表、石貫弘泰「今治市新谷・新谷古新谷遺跡の調査成果について―弧帯文土器を中心に―」。2018年9月～11月「いにしへのえひめ」発掘調査速報展で遺物展示、パンフレット配布。2022年6月～7月「伊予の弥生集落」企画展で遺物展示、パンフレット配布。
- *2 弧帯文土器が出土した新谷古新谷遺跡の4区谷1土器はコンテナ800箱以上あり、弧帯文土器の時期については現状での見解を示す。土器接合は完了していないが、遺構全体では弥生時代後期後半～終末までの複合口縁壺、長頸壺、器台、鉢、タタキを残す甕、支脚などがあり、吉備系の甕、長頸壺や高杯なども認められる。
- *3 楯築神社弧帯文石と出土弧帯文石の記述は宇垣編2021『楯築墳丘墓』より引用。楯築神社弧帯文石は「施帯文石」として重要文化財に指定されているもので、長さ89.3cm、幅91.9cm、高さ36.2cmの大型石材に弧帯文がめぐる。出土弧帯文石は埋葬施設の円礫堆から出土したものを指し、長さ56.9cm、幅32.4cm、高さ17.7cmで楯築神社弧帯文石よりかなり小さい。上部および側面の表層が破片となり熱を受けて割れた状態となっている。
- *4 宇垣編2021『楯築墳丘墓』で使用された名称で、円形の芯(高橋1984)や円孔(宇垣2018)とも呼ばれている。
- *5 以下、吉備の土器については岡山県報告書に用いられている津寺編年による。
- *6 このほか大阪府久宝寺遺跡の壺や奈良県唐古・鍵遺跡の小型長頸壺などが知られる(櫻井2005・菅原2012・2015など)。
- *7 未報告資料で下條2008より拓本を引用させていただいた。妙見山1号墳出土の伊予型特殊器台に描かれた弧帯文Aとされる巴形透かしをもち組紐状に絡まる弧帯文が、弥生時代終末期の伊予出土の文様から辿れる根拠として示された。本稿では古墳時代以降の弧帯文について扱うことが出来なかったが今後検討してみたい。

参考文献

石野博信1991「報告書『纏向』以後の調査成果と新知見」『大和考古資料目録』第18集 奈良県立橿原考古学研

究所附属博物館

- 宇佐晋一・斎藤和夫1976「纏向石塚古墳南側周溝から出土した弧文円板の文様について」『纏向』橿原考古学研究所 140頁
- 宇垣匡雅1981「特殊器台型土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27巻第4号 55～72頁
- 宇垣匡雅2000「鋸歯文をもつ土器—吉備の農耕儀礼と葬送儀礼—」『考古学研究』第47巻第2号 105～124頁
- 宇垣匡雅2016「特殊器台祭祀の性格とその波及」『古代吉備』第27集 古代吉備研究会 36～57頁
- 宇垣匡雅2018「弧帯文の特性」『古代吉備』第29集 古代吉備研究会 12～31頁
- 宇垣匡雅編2021『楯築墳丘墓』岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室
- 梅木謙一2000「3伊予中部地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社 211～282頁
- 梅木謙一2001「伊予中部の土器」『庄内式土器研究』XXIV 庄内式土器研究会 113～132頁
- 梅木謙一2015「愛媛県中予における複合口縁壺」『平成27年度瀬戸内海考古学研究会第5回公開大会予稿集』瀬戸内海考古学研究会 117～138頁
- 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2018「4.新谷古新谷遺跡2次」『愛比売』平成29年度年報 24～26頁
- 北島大輔2004「組帯文の展開と地域間交流—古墳出現期の伊勢湾地方を中心に—」『駿台史学』120号 67～106頁
- 近藤義郎1980『楯築遺跡』山陽カラーシリーズ3 山陽新聞社
- 櫻井久之2005「久宝寺遺跡の弧帯文壺・手焙形土器について—弧帯文の系統的理解に向けて—」『大阪文化財研究』第28号 31～40頁
- 櫻井久之2006「鍵手文の形成と展開—久宝寺遺跡出土の手焙形土器を手掛かりとして—」『大阪文化財研究』第29号 1～12頁
- 柴田昌兄2000「4伊予東部地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社 283～366頁
- 柴田昌兄2001「伊予東部地域における古墳時代初頭前後の土器様相と地域間交流」『庄内式土器研究』XXIV 庄内式土器研究会 89～105頁
- 柴田昌兄・松村さを里2014「愛媛県における古式土師器の基礎的研究」『古式土師器の編年的研究—四国島の古墳時代前期の土器様相—』四国考古学研究会 47～97頁
- 下條信行2008「伊予型特殊器台について」『妙見山1号墳』愛媛大学考古学研究室・今治市教育委員会 251～266頁
- 菅原康夫1993「吉備型祭式の波及と変容—弧帯文の生成と思想的背景—」『真朱』第2号 49～72頁
- 菅原康夫2002「弥生時代 X弧帯文」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会 63～97頁
- 菅原康夫2012「原単位図形の出現」『真朱』第10号 1～30頁
- 菅原康夫2015「鍵手文のデフォルメ—非原単位構造論—」『真朱』第11号 1～20頁
- 高木邦宏2015「宇和盆地の複合口縁壺」『平成27年度瀬戸内海考古学研究会第5回公開大会予稿集』瀬戸内海考古学研究会 97～116頁
- 高橋護1984「組帯文の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究報告』5 1～27頁
- 坪根伸也2010「弥生時代後期から古墳時代前期の土器による時期区分」『下郡遺跡群VIII』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書100 79～87頁
- 名本二六雄1984「原単位系直弧文の一類型—道後姫塚の壺と酒津の壺と—」『遺跡』第25号 66～72頁
- 名本二六雄1985「松山市文京遺跡の組帯文土器」『愛媛考古学』8 愛媛考古学協会 5～10頁
- 春成秀爾2017「宮山系特殊器台の研究」『岡山県立博物館研究報告』第37号 5～26頁

春成秀爾2018「向木見系特殊器台の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第212集 183～234頁

松村さを里2015「愛媛県東予における複合口縁壺—今治平野を中心に—」『平成27年度瀬戸内海考古学研究会第5回公開大会予稿集』瀬戸内海考古学研究会 139～158頁

渡邊恵理子2001「弧帯文土器について」『下庄遺跡・上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(以下、岡山県報告とする)157 327～332頁

挿図出典

図1：国土地理院2万5千地図をもとに(公財)愛媛県埋蔵文化財センターが作成した愛媛県地図を利用。

図2：筆者実測。

図3と図4：合成写真は(公財)愛媛県埋蔵文化財センター作成。口縁部弧帯文展開は(公財)愛媛県埋蔵文化財センター作成トレース図を使用し線の切り合いなど一部修正加筆した。

図4・5：図3をもとに筆者作成。

図6-1,2：宇垣匡雅編2021『楯築墳丘墓』

図7-3：今谷遺跡1_1870,岡山県教育委員会2009『百間川今谷遺跡4』岡山県報告217、

図7-4：原尾島遺跡新田サイフォンH-1_99,左岸用水1-H-1_426,同一個体とされる第130図-99に第57図-426の拓本を合成。岡山県教育委員会2000『百間川原尾島遺跡1』岡山県報告39、

図7-5：高塚遺跡土器溜まり4_4218,岡山県教育委員会2000『高塚遺跡・三手遺跡2』岡山県報告150、

図7-6：上東遺跡波止場状遺構_874,岡山県教育委員会1997『前山遺跡・鎌戸原遺跡』岡山県報告115、

図7-7：足守川矢部南向遺跡竪穴建物37上層_601,岡山県教育委員会1995『足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡』岡山県報告94、

図7-8：前山遺跡_358,岡山県教育委員会1997『前山遺跡・鎌戸原遺跡』岡山県報告115、

図7-9・10・12：津島遺跡河道1_691,694,695,岡山県教育委員会2003『津島遺跡4』岡山県報告173、

図7-11：宮山遺跡,河本清1992「集成5 絵画土器、人形・鳥形スタンプ文土器」『吉備の考古学的研究』(上)562頁-17、

図8-1：松山大学構内遺跡2次SB7_60,松山市教育委員会・埋蔵文化財センター1991『松山大学構内遺跡第2次調査』松山市文化財調査報告書20、

図8-2：東本遺跡4次SB502_593,松山市教育委員会・埋蔵文化財センター1996『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』松山市文化財調査報告書54、

図8-3：坪栗遺跡SD01_15,西予市教育委員会2009『坪栗遺跡』西予市埋蔵文化財調査報告書第1集、

図8-4：上井遺跡III区SD7_75,(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター1999『上井遺跡』愛媛県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(以下、愛媛県埋蔵文化財センター報告書とする)第77集、

図8-5：筆者実測、

図8-6：杣田池田遺跡SX1_250,(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター1999『杣田池田遺跡2次・3次』愛媛県埋蔵文化財センター報告書第153集、

図9-1～11：朝倉下下経田遺跡SR01_265,266,696,SD21_2080,2081,SR04_2216,2217,2218,包含層_2476,2477,SX19_2707,(公財)愛媛県埋蔵文化財センター2020『朝倉下下経田遺跡』愛媛県埋蔵文化財センター報告書第198集、

図10-1：樽味高木遺跡第6次調査,下條2008、図10-2：文京遺跡構内,名本1985、図10-3：宮前川遺跡津田第II地区_14,(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター1986『宮前川遺跡』愛媛県埋蔵文化財センター報告書第18集

(2023年3月31日)